

平成21年7月3日
筑波大学

「国際化拠点整備事業」(グローバル30) 概要説明
筑波大学の国際化拠点構想のコンセプト

筑波大学は開学当初から、名実ともに「開かれた大学」として、アジア、欧米諸国から多くの留学生と外国人教員が日本人学生・教員とともに学び研鑽しあう共生の場「知の世界拠点として世界と共生する大学」としてスタートしました。

また本学は、「筑波研究学園都市」の中核機関として、諸研究機関との連携を積極的に推進しており、今後はさらに筑波ぐるみの国際化を推進する拠点としても、そのハブ機能を充実したいと考えています。すでに筑波大学には約1500名の留学生が在籍しており、大学からの宿舍の提供とあいまって、地域社会にとけ込んでいます。

このように建学の理念と科学都市としての国際的な実績に基づき、サイエンス、国際性の意識の共有が定着している筑波の特性、メリットを十分に活かしたいと考えています。さらに本学は、体育、芸術、医学を持つ特徴ある総合大学として、「心のケア、スポーツ、芸術、健康、ライフライン」も含めて全人的に留学生を支援することにより、世界の人々と協働でき、グローバル化した社会において人類の進歩と平和に貢献できる人材育成を主眼とする教育・研究の世界的拠点構築を目指しています。

筑波大学が21世紀において目指すビジョンは添付の概念図の通りです。

本学が、21世紀において果たすべき役割として、第一は、「高い研究レベルに裏打ちされた知の蓄積、発信」であり、第二はグローバル化した社会において「国際的なリーダーとなる人材の育成」であり、第三は、社会的貢献において「地球的規模の課題に対する解決策の提示」であると考えています。

これらを実現するために、本学は、多くの国際連携における実績のなかでも特色あるものとして、我が国の国際戦略上のフロンティアである北アフリカ(チュニジア)と中央アジア(ウズベキスタン)に海外拠点を構え、優秀な留学生の受入れと学術交流に多くの成果を挙げてきています。さらに本年度中に設置予定のベトナム、ドイツ、中国の海外拠点も加えて、ユニークな学術ネットワークを展開しつつ、留学生の受け入れや渡日前・帰国後の支援を促進していきます。

本学では、現状でも国立大学の中では3番目に多い留学生を受け入れています。平成32年度までに学生の4人に一人が留学生、教員の10人に一人が外国人という文字どおりの「世界との共生」の場を確立し、留学生と地域社会との交流を促進して、筑波研究学園都市に根差した特色のある国際化、すなわち「国際性の日常化」を推進いたします。

平成21年7月3日
筑波大学

筑波大学の国際化拠点構想概要

本学では、開学当初から「知の世界拠点として世界と共生する大学」を目指し、先進国・途上国を問わず環境問題、感染症、国際紛争など緊急の地球規模課題の解決に貢献する人材の育成と、国際的に活躍できるリーダーの育成を主眼として、留学生だけでなく日本人学生の国際化に効果的な「英語で学び英語で自己表現をする」教育を目指してきました。

1. 大学の国際化に向けた取り組みの実績

(1) 「留学生の受け入れの実績」

本学は学部レベルの短期留学国際プログラム、大学院での11の英語プログラムを整備し、平成20年5月1日現在97カ国から1,337名の留学生を受入れています。全学生数に占める留学生比率は約8.1%であり、国立大学の中では3番目となっています。特に留学生のうち、研究生等を含む大学院生は81.5%であり、大学院大学として国際的に高度な人材養成に貢献しています。こうした努力の結果、従来、留学生の出身国が東アジアを中心とした約70カ国で推移していたものが、アフリカや中央アジア等を加えて現状で97カ国となり地域的な広がりを持つに至っています。なお、本年5月1日現在、留学生総数は101カ国から1522名になっています。

(2) 「日本人学生に対する教育課程に位置づけられた留学プログラム」

本学では大学間交流協定校を中心に本学生の留学を推進しており、平成20年度では221名の学生を協定校に派遣しました。

学部レベルでは、外国語センター、人文・文化学群日本語・日本文化学類、生命環境学群生物資源学類で、語学研修や国際インターンシップ科目を設置し、協定校への短期派遣や実習や調査を行ってきています。また、チュニジア政府の奨学金プログラムによって毎年、数名の学生を夏季アラビア語集中講座に派遣しています。

大学院レベルでは、数理物質科学研究科物理学専攻をはじめとして5研究科の7専攻で、アメリカなどの海外の先端的研究機関に院生を派遣して研修、現地調査、インターンシップを経験させています。東アジア、東南アジア、中央アジア、ヨーロッパ、北アフリカなどにも院生を派遣して現地調査実習や語学研修を行なっています。

2. 国際化拠点の構想

(1) 「英語による授業のみで学位が取得できるコースの計画」

本学では、本事業期間中に、まず学部レベルで3コース、大学院レベルで少なくとも6コースを来年度から、新たに開設します。添付の表の中で、赤字で記載されているコースがこれにあたります。

本学において英語科目は学群で148科目、大学院で272科目がすでに開設されており、大学院における既存の英語学位プログラムは11にのぼっています。

これらをもとに、英語開設科目群を再編しつつ基礎教育の強化を中心とした全学英語共通科目群を構築し、生命環境科学、医療科学、国際関係などの国際的に緊急性の高い分野で学部と大学院との一貫性のある英語プログラムを整備します。

これらのプログラムについて、学長直属で常設の「国際化推進委員会」を設置し、英語プログラムの整備、教育・事務スタッフの意識改革と資質向上、共同利用事務室・海外拠点の運用、留学生の募集と受入れに関わる総合的な全学統括機能を付与し、英語プログラムの運営における全学体制を構築します。

(2) 「留学生の受入れのための環境整備」

本学は、平成20年度実績で、49ヶ国、172の大学・研究所・国際機関との交流協定を締結しており、留学生の受け入れにはこれらの協定校を中心として受け入れを進めます。また本学の海外拠点を活用して、アフリカ、中央アジア・トルコの諸地域からの受け入れを重点的に実施します。さらに、今年度中に海外拠点を開設するベトナムやドイツ、中国からも現地ネットワークを使って受け入れをさらに拡充します。

日本での生活に対する主な支援は、宿舍の整備・改修、カウンセリング体制の拡充、学内文書の多言語化の促進、諸手続きの支援の強化、などを計画しています。特に学生宿舍については、現状でも3927室の宿舍を留学生に優先的に配備しており、希望する留学生のほとんどが入居できますが、今後留学生数の増加に対応できるようにさらに拡充します。

そのほか、経済的支援の確保、日本語・日本文化の学習機会のさらなる充実、留学生に対するキャリア支援制度の拡充などに、重点的に取り組みます。

また留学生の家族のサポートもさまざまな形で充実させます。

(3) 「海外大学共同利用事務所の概要」

本学には海外拠点として、チュニジアのチュニスに設置した北アフリカ・地中海連携センターとウズベキスタンのタシケントに設置した中央アジア国際連携センターという特色ある海外拠点が存在します。

北アフリカ・地中海連携センターは平成18年5月の開所以来、日本の大学として唯一の北アフリカ地域における学術拠点として、教育・研究分野で多くの実績を積み上げて来た。これらの実績を基に、他大学にも門戸を開いた海外大学共同利用事務所として再編強化し、北アフリカだけでなく、アフリカ全域や中東を対象とします。

中央アジア国際連携センターは平成19年6月に設置され、中央アジア諸国の教育・研究機関との連携を図り、中央アジア地域の学術交流ネットワークの構築に貢献してきました。本事業では、中央アジア、コーカサスに加え、トルコ語圏の留学プログラムを強化して、トルコからの留学生の受入事業も支援します。

(4) 「拠点構想の達成目標」

達成数値目標としては、留学生数を、現状の1337名（本年5月で1522名）から平成22年度末には2000名に、平成25年度末には3000名、平成32年度末には4500名と増加させることを目標とします。これによって平成32年度には留学生の比率は24.9%となります。留学生と国際社会でのニーズの高い分野の9の英語プログラムを新たに設置するとともに、外国人学生が日本に留学しやすいように、短期留学国際プログラムをさらに充実・整備します。

また、外国人教員数は現状では86名であるが、平成22年度末には121名、平成25年度末には160名となって平成32年度に続き、外国人教員比率は10.9%となります。外国人教員としては語学だけではなく、しっかりとした専門を持っている研究者を公募します。

本学からの海外派遣学生数は、現状では221名に留まっているが、これも留学基金の整備や単位互換・デュアルディグリー制度などを拡充して、平成32年度には1000人以上に増やすことを目標とします。

本学の国際化事業の特色と目標

国際化拠点形成事業を実施する際に、「世界との共生の場」という国際化のコンセプトを基調として、大学内に「国際性の日常化」を実現すべく計画を立てます。それによって、本学では、高い研究レベルに裏打ちされた「知の蓄積」を基盤として、地球規模課題に対する解決策を提示し、国際的リーダーとなる人材の育成を目指し、留学生にとっても日本人学生にとっても、魅力ある勉学の場を実現します。

本学は、我が国で有数な広大なキャンパスを有しており、自然に恵まれた緑豊かな環境の中で、学生の4人に一人、教員の10人に一人が外国人であり、彼らが日本人学生や教職員と助け合いながら切磋琢磨するという「共生の場」を形成することができます。

世界に誇る国際性豊かな筑波研究学園都市の中核的存在である本学は、この事業を契機として、つくば市を中心とする地域住民、先端的研究機関、本学の三者が協働して、市民社会に根差した国際化を推進するモデルケースとなることを期待しています。

機 関 名 筑波大学

〔国際化拠点の構想の概要〕

筑波大学はその建学の理念において名実ともに「開かれた大学」として、「国内外の教育・研究機関及び社会と自由かつ緊密なる交流を深め、学際的な協力の実をあげながら、教育・研究を行い、もって創造的な知性と豊かな人間性を備えた人材を育成する」ことを掲げている。このように、開学当初から多くの留学生と外国人教員が日本人学生・教員とともに学び研鑽しあう共生の場「世界との共生の場」としてスタートした。また最先端レベルの研究水準と規模を誇る「筑波研究学園都市」の中核機関として期待され、諸研究機関との連携を教育・研究に活かしながら発展して来た。このような建学の理念と立地上の優位性を持つ本学は、これまでの国際連携事業の実績を基盤に、世界の人々と協働できる人材育成を目指して、21世紀における教育・研究の世界的拠点構築を目指している。今回の国際化拠点構想は、本学が教育研究を通して国際社会でのリーダーを目指す一方、学生と教職員が世界の一員であることを日常的に実感する環境が具現化出来る「国際性の日常化」の契機であると認識している。本構想においては、留学生数の飛躍的な増加を目指し、平成32年で留学生4,500名、外国人教員160名以上(全教員の10%以上)、海外派遣日本人学生年間1,000名、英語で学位の取れる新規コースを5年以内に学部レベルで3つ以上、すでに実施済みの大学院でも6つ以上開設する。なお、本拠点構想の遂行に際しては下記の4点に特別の力点を置いて実施する。

① 学際的な英語学位プログラム充実と日本語・日本文化の習得機会の提供:

「世界との共生」の意識を高め、また「国際性の日常化」をさらに推進すべく、本構想においては単に「授業の英語化」を行うのではなく、グローバルに活躍できる人材の育成を目指し、留学生にとっても魅力ある勉学の場を実現する。特に本学ならではの学際的学問分野を活かした授業や研究指導を展開し、留学生にも日本人学生にも有益な英語による学位取得可能なプログラムの構築を行う。その際、本学が豊富な実績を有する日本語・日本文化の科目の充実を図りつつ、留学生の日本語能力の向上と日本理解の深化にも努める。また従来は、英語のみで学位取得可能なプログラムは大学院に限られていたが、新たに学部レベルでも英語によるプログラムを複数設置する。具体的には、今後5か年間に生命環境分野、国際総合分野、医科学分野での開設を、また大学院レベルでは既存の英語学位プログラムが実績を挙げつつあることを踏まえ、大学院共通科目の整備強化を推進し、e-learningをさらに拡充して、英語学位プログラムの増設発展を目指す。

②全学の教育・支援システムの多言語対応化:

本学は建学以来、外国人教員の重点配置等を行って教育・研究面での国際化の実を挙げて来た。今後はこの方針をさらに進めるために、教育・研究スタッフにおける外国人教員の増員を図る。さらに事務系職員についても、外国語能力の向上と多言語対応化を図るために、外国語能力の高い人材の新規任用を進め、現有の事務職員に対する語学研修コースの拡充、海外派遣の充実を図る等の重点的措置をとり、学内の意識改革を進めて留学生に対する教育支援システムをいっそう整備する。

③国際的ネットワークの強化:

本学では、平成21年4月現在、49ヶ国、172の大学・研究所・国際機関との連携協定を締結済みで、協定校との間で双方向的な留学生の交流を推進している。海外拠点として、我が国の国際戦略にとってフロンティアである北アフリカ(チュニジア)と中央アジア(ウズベキスタン)に2拠点を設置し、優秀な留学生の受入れに多くの成果を挙げているが、本事業において両拠点からそれぞれ300名、600名の留学生を受け入れる。また、両拠点では全国共同利用事務所として再編強化の上、全国の大学へのサービスを提供する。とりわけ渡日前入学許可・渡日前教育について他大学との共用体制を整える。この他に、本年中に中国、ベトナム、欧州(ドイツ)での拠点を開設する。

④筑波研究学園都市に根ざした国際化

本学は最先端レベルの研究水準と規模を誇る「筑波研究学園都市」の中核機関として建学され、「つくば」の地の利を活かした国際化に取り組んできた。つくば市内の主要な先端研究所と連携した既存の「連携大学院制度」の拡充の他、各研究所に勤務する外国人研究者を講師として大学へ招聘し専門性の高い英語での講義の実施などを計画している。また、つくば市に在住する外国人研究者・教員とその家族のために友好的な生活環境の整備を図るべく、本学はつくば市並びに市内の主要な研究機関と協議を進めている。一例として、留学生・外国人教員と地域住民が、英語で自由な会話を楽しめる国際空間「City Chat Café」を昨年度から学外で開催して好評を得ており、このような交流の場の機能をさらに推進する。

国際化拠点の概念図（海外における留学を促進するための取組、国内における留学生の受入のための取組について、構想の達成目標と取組計画をわかりやすく図示してください。）

知の世界拠点として世界と共生する筑波大学

ユニークな国際ネットワークに基づく重点的学術交流

東南アジア、中央アジア、中東、東欧、地中海、アフリカ地域の重点化

共同利用事務所：北アフリカ・地中海（チュニジア）、中央アジア（ウズベキスタン）
海外拠点：ドイツ、ベトナム、中国

海外拠点を基軸とした学術ネットワークの展開・ワンストップサービスの提供

留学生の渡日前・帰国後の支援 派遣中の学生・教員のサポート 有力大学との連携

多様な地域からの留学生の受け入れ

	H20	H32
	1377名	4500名
中国	38.5%	30%
アジア	39.9%	40%
その他の地域	21.6%	30%

日本人学生の海外派遣

	H20	H32
	221名	1000名

国際性が日常化した大学環境の実現

英語による学際的基礎教育と高度専門教育

学群	大学院		
生命環境科学	新設 1	新設 2	既設 4
社会・国際/ 人文社会	新設 1	新設 1	既設 4
医学/人間総合	新設 1	新設 2	既設 1
数理物質		既設 1	
システム情報工学		新設 1	
ビジネス (社会人大大学院)		既設 1	

日本人学生の国際化

語学力向上の取組み
海外有力大学とのデュアルディグリー・単位互換の拡充
海外派遣助成制度の積極的活用

留学生と日本人学生の共生

チューター制度によるマンツーマンの交流
留学生への学生宿舎の優先的提供、日本人学生との混住
留学生に対する日本語・日本文化教育の拡充

多言語に対応した教育・学生支援

外国人教員の積極的配置
職員の国際化の推進
事務手続き、学内文書の多言語対応

筑波研究学園都市に根ざした国際化

研究機関と連携した教育
外国人に優しいまちづくりに向けた協同
留学生と市民の交流の促進

「国際化推進委員会」を中心とした全学的実施体制の強化

教育・学生支援・国際関連部署の連携強化

高い研究レベルに裏打ちされた「知の蓄積」

国際的リーダーとなる人材の輩出

地球規模課題に対する解決策の提示